巻頭言

専門日本語教育研究の一方向（5）
―「何を」から「どう」へ―

専門日本語教育研究会会長
大 坪 一 夫
（麗澤大学外国語学部教授）

我々の研究が相変わらず「何を教えるか」に過度に偏っていると感じるのは，頑迷固陋な老人の愚かな感想に過ぎないのだろうか。今号では，この点について再度考えてみることにする。

私は，1号の最後のところで次のように書いた。「科学技術日本語教育が日米間の大きな問題になっていたころの日本経済新聞にLSIを「集積回路」ということが日本語学習上の困難点の例として挙げられていたが，それは，大問題ではない。LSIについて十分な知識を持つ学習者に，LSIは日本語では「集積回路」と書き，「しゅうせきかいろ」と読むのだと教えれば，それでもう十分である。しかし，LSIそのものを知らない学習者に，それに当たる日本語の単語を教えても，猫に小判に過ぎないだろう。言語知識上の若干の変化が言語運用能力にほとんど何の影響も与えないのだから」。これは，言語能力は一定期間安定しているが，言語運用能力は時々刻々と変化しているという文脈の中で書かれたものである。

我々がしなければならないことは，「読解」，「聴解」，「作文」，「講演」とは何かという研究であるだろうと思う。例えば，読解は，読者が，紙などの上のインクの染みを著者の意図した意味に換える過程であると大まかに理解してもそう大きな間違いではないだろうと思う。もし，我々がこの過程を完全に理解したとすれば，その過程のどこにどのような介入をすれば，学習者の読解力のどこに貢献できるか，また読解に難のある学習者の問題点が何かを把握し，その問題に対処することが可能になるのではないだろうか。何を教えるかの研究は，読解の過程の一部への貢献であるにすぎないと考える理由はここにある。母語話者の間にも読む速さには違いがあるが，外国語/第二言語の場合には，その違いが更に広がる。その原因は，たぶん外国語の能力の差だろうと思うが，それが，外国語の語数の差なのか，語へのアクセスの自動化の程度の差なのか，文法力なのかなどといったことは，一切不明であるのが現状であるように思う。

さて，現状では，「読解」がどういう過程なのかは，明瞭ではない。少なくとも私には明瞭ではない。そこで，Stanovich K. E.をモデルに考えてみたい。

Stanovich(1980)は，「読み手は，読解において，その読み手がより劣る点をより優れた点で補いながら，読解を行う」（小池生夫等（2003）『応用言語学事典』，研究社）と述べているが，これを見るとStanovichは，読解を成り立たせるためにはいくつかの部門が関係していると考えているようだ。いくつかの部門として考えられるのが，語彙部門，統語部門，意味論部門，語用論部門，書式部門，世界知識部門などだろう。語彙部門に貢献するのは，専門用語の調査のような研究だろう。統語部門に貢献するのは，例えば，「『比較』はこのように表現する/さ

れる」のような研究だろう。

1 号でも述べたように，我々の理解力は，言語能力ほど安定したものではなく，時々刻々変化する。ある記事はすいすい読めるのに，ある記事は難解で，時には事典からの援助を必要とする場合さえでてくる。このように考えると，世界知識部門の影響が理解力の変動を説明するように思われる。先に「日本経済新聞にLSIを「集積回路」ということが日本語学習上の困難点の例として挙げられていたが，それは，大問題ではない」と書いたのは，LSIの研究者がLSIを日本語では「集積回路」と書き，「しゅうせきかいろ」と発音することを知れば，そこから先は，素人の日本人の集積回路の理解よりは数百倍，数千倍も良い理解に到達する。そして，その世界知識部門をフルに活用して，語彙部門，統語部門，意味論部門，語用論部門，書式部門の弱点をカバーすることになる。

逆に，漢字圏の学習者であれば，強力な語彙部門の助けによって，他の5部門の弱点をカバーすることになるだろう。

我々がまず最初にしなければならないことは，「読解」，「聴解」，「作文」，「講演」というのがどのような過程なのかの理解なのではないだろうか。その理解に基づいて，眼前の学習者の弱点を明らかにし（明らかにする方法は，別途考えなければならない。），その弱点を補うために何をすべきかが見えてくることになる。何をすべきかの中の1つとして知識の注入があり，そのときに「何を」の研究が意味づけられる。注入された知識は，すばやく利用される状態になっていなければならないが，すばやく利用される状態の知識にするためには何をすべきかは明らかではない。たぶん何度もその知識を利用する課題を学習者に与えることが役に立つだろうとは考えられるが，その課題が何かを我々は知らなければならないだろう。どのような課題がどのような学習者のどのような弱点を補うために有効かという問いにも答えなければならないのが我々の現状である。

結論として，我々は，「読解」，「聴解」，「作文」，「講演」がどのような過程なのかを理解し，学習者の弱点がその過程のどこにあるかを明らかにする方法を開発し，その弱点を補強するためにどのような課題を与えるかのが有効かを知る必要があるということになる。何をの研究の重要さを認めつつも，「どう教えるか」の研究の重要性を主張したい。